

授業づくりに関する事例集

H31. 3. 12

ページ

1	学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり <u>(全体)</u> に対する指導方法（一部抜粋）	
・	国語総合	1
・	社 会	3
・	理 科	4
・	体 育	6
2	学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり <u>(個人)</u> に対する指導方法（一部抜粋）	
・	国語総合	8
・	理 科	11
・	体 育	13
3	特別な教育課程（自立活動）に関する指導方法（一部抜粋）	
・	実践事例①	15
・	実践事例②	17

【事例】

〈学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり（全体）に対する指導方法〉

(1) 対象とした学年

第2学年

(2) 教科名

国語総合

(3) 実施した指導内容

ア 学習活動を行う場合に生じる困難さ（実態・想定）

- ・ 学習経験が少なく、語彙が乏しい。
- ・ 読めない漢字が多々ある。
- ・ 作中の登場人物の相関関係や場面をイメージできない。
- ・ 作中の登場人物の心情が理解できない。
- ・ 今、どこを読み、どの活動に取り組んでいるのか分からなくなる。

イ アに対し実施した指導方法

- ・ 教員による補足的な語句の意味の説明
- ・ 生徒による辞書の活用
- ・ プリント等へのルビ振り
- ・ 登場人物やその関係性の提示
- ・ リアルタイムで活動の様子提示

ウ イの結果（生徒の変容を含む）

- ・ 語彙の定着までは難しいが、意味の確認、ルビ振り等を行うことで、最後まで作品を読むことができ、また、文脈の理解が増した。
- ・ 登場人物を示しその関係性を示すことで、作品の様子イメージしやすくなり、また、登場人物の心情を考える手だてとなった。
- ・ リアルタイムで活動を示すことにより、生徒が遅れる場面が少なくなった。また、仮に活動に遅れてもリカバリーすることができる生徒も増えた。

エ 活用した情報支援機器・ソフト

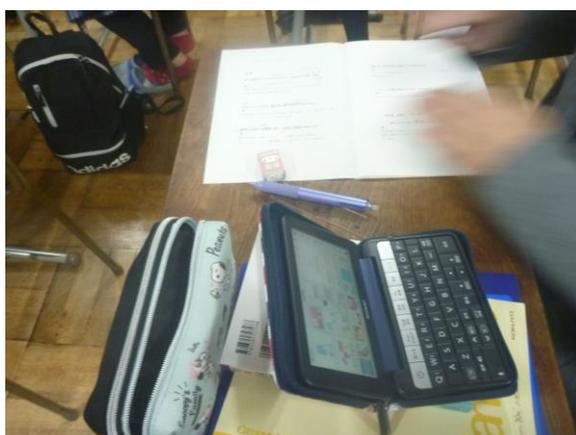
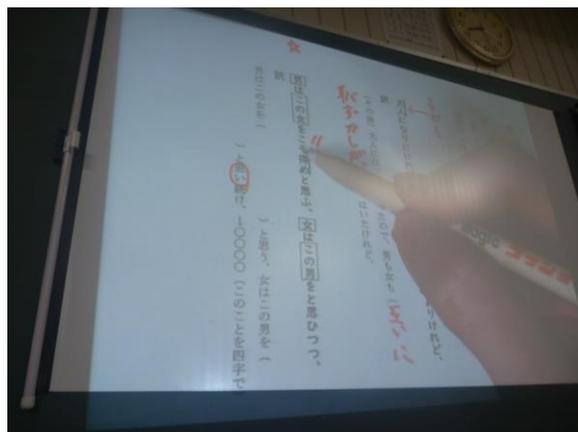
《情報支援機器》

- ・ iPad、マグネットスクリーン、電子黒板、書画カメラ、電子辞書

《使用ソフト》

- ・ 写真ソフト、プレゼンソフト

オ 写真



(4) 支援機器等教材を活用する際の留意点 (選定検討・実践・学習評価)

- ・ 設置に時間を要するため、授業前に設定が終わるように準備する。
- ・ 機器の不具合があった場合も想定した、教材の準備を行う。
- ・ スライド等で示すことで、授業テンポが速くなりがちになるため、必要に応じて生徒への確認を行う。
- ・ スライド等だけの学習では、取り組んできた内容の蓄積ができないため、書き写しやファイル等の整理等の時間を設ける。
- ・ 情報量が多くなりやすいため、資料の精選等教材研究を確実に行う。
- ・ 板書と機器による内容の提示のバランスを考えた効果的な機器の使用を事前に検討する。

【事例】

〈学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり（全体）に対する指導方法〉

（１）対象とした学年

第1学年

（２）教科名

社会

（３）実施した指導内容

ア 学習活動を行う場合に生じる困難さ（実態・想定）

- ・ 教科書や資料集の文字や写真の大きさが、生徒によって見えにくい場合がある。
- ・ グループワークの発表を聞くだけでは内容の共有が難しく理解を深めることができない。

イ アに対し実施した指導方法

- ・ iPad や電子黒板の拡大表示機能を活用して、文字や写真を拡大する。
- ・ ミニホワイトボードにまとめたグループワークの内容を、電子黒板に投影する。

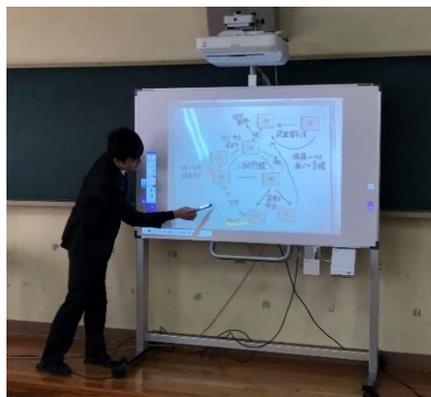
ウ イの結果（生徒の変容を含む）

- ・ 全員に電子黒板の文字や写真を見えやすいようにすることは難しいが、数パターンの大きさを表示したので生徒の反応はよかった。
- ・ グループのまとめを表示したり、生徒が説明したりすることで意欲が向上し理解が深まった。

エ 活用した情報支援機器・ソフト等

ノートパソコン、iPad、電子黒板、パワーポイント、カメラアプリ

オ 写真



（４）支援機器等教材を活用する際の留意点（選定検討・実践・学習評価）

- ・ ICT 機器等を活用すると効果があると考えられる“場面を設定”し、グループワークの内容を共有することが重要。
- ・ 今回は、iPad で撮影した画像を電子黒板に投影し、それを用いて生徒が説明することで内容を共有し、理解を深めることを授業のねらいとした。
- ・ グループワークの発表では、他のグループの説明に興味深そうに見たり、大きく頷いたりする生徒もいた。一方で、生徒が主体的に ICT 機器等を操作するまでには至らなかった。事前に準備等を行えば、生徒の主体的な ICT 機器等の活用から、学びを深めることも可能であると感じている。

【事例】

〈学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり（全体）に対する指導方法〉

(1) 対象とした学年

第2学年

(2) 教科名

理科

(3) 実施した指導内容

ア 学習活動を行う場合に生じる困難さ（実態・想定）

- ・ 学習内容には、物体の運動などの現象をイメージする力を必要とする場面が多くある。しかしながら、現象をイメージすることが苦手な生徒が少なからず存在し、言葉だけの説明では理解が難しく学習活動が進まないことがある。
- ・ 講義型の授業を行う上で、集中力が乏しい生徒は学習活動に対して受動的になり、理解が進まないことがある。

イ アに対し実施した指導方法

- ① iPadで、あらかじめ撮影した現象を動画で見せる。
- ② iPadのハイスピード撮影アプリを使用して、運動の様子を撮影後、スローモーション映像で運動の様子を確認する。
- ③ 与えられた問題について、生徒一人ひとりが解答の過程を含めた内容を紙に記入後、iPadで撮影する。その撮影した画像をプロジェクターでホワイトボードに映し出し、解法や解答について複数の生徒でディスカッションする。

ウ イの結果（生徒の変容を含む）

- ① 言葉の説明では理解できなかった内容を、動画を見ることで理解できる。
- ② 実際の運動のスピードでは視認できない現象を、スローモーション映像を見ることで確認できる。
- ③ 同じ問題に対して、自分と他の生徒の解法や解答を見比べることで、ディスカッションが進み、より効率的で論理的な解法を考える機会となる。

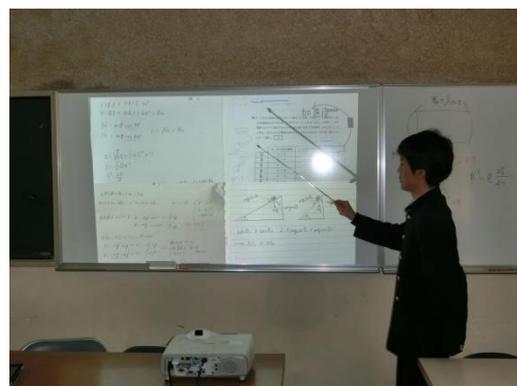
エ 活用した情報支援機器・ソフト

- ・ iPad（カメラアプリ、投影アプリ、スケッチアプリ）
- ・ プロジェクター（無線ユニット）

オ 写真



iPadでスローモーション映像を確認



カメラアプリで撮った画像を基に説明

(4) 支援機器等教材を活用する際の留意点（選定検討・実践・学習評価）

- ・ 情報端末に関するアンケート等を行うなど、各学校の生徒の情報端末の活用能力がどの程度あるのかを把握した後、支援機器等の教材を購入した方が良いと考える。本校はアンケートを行ってはいないが、iOS(iPhone)を使用している生徒が多く、iPad の操作にもすぐに対応できる生徒が多く見られた。
- ・ 情報モラルの観点から、生徒どうしの安易な撮影等に対する注意など、事前指導をしっかり行っておく必要がある。

【事例】

〈学習上の支援機器等を活用した通常の学級における授業づくり（全体）に対する指導方法〉

(1) 対象とした学年

第1学年

(2) 教科名

体育

(3) 実施した指導内容

ア 学習活動を行う場合に生じる困難さ（実態・想定）

- ・ 基礎となる技術が、すぐには理解しにくい（どうすればよいのか、ポイントとなる部分につかめない）。
- ・ 自分の身体の動きがよく分からない（手本との違いだけでなく、自分が自分の体をどう動かしているのかがイメージできない）。
- ・ 用具の準備や片付けも含め、グループ学習での自分の役割と活動などが分からない（何をどうするのか、自分は何をすればよいのかを言われないと動けない）。

イ アに対し実施した指導方法

- ・ 手本となる動きを見せる（卓球部員や上手な生徒の動きを撮影して見せる）。
- ・ 運動している姿を録画して見せる（個人の動き、ペアやグループの動きが伝わるように工夫して撮影する）。
- ・ 準備や片付けも含めて、手本となるグループの学習方法なども録画しておき、再生時にそれについてもコメントする（同じようにすればよいと気づくように伝える）。

ウ イの結果（生徒の変容を含む）

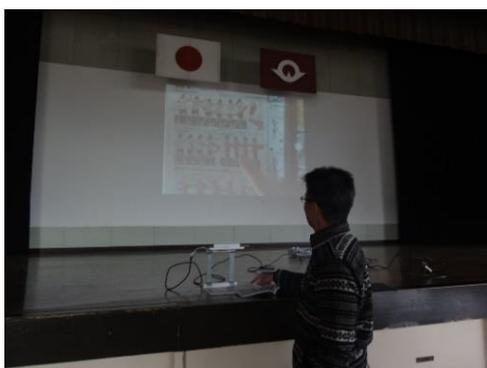
- ・ 手本となる映像を繰り返し見せたり、一時停止して解説を加えたりしたことで、どこがポイントになるのかを理解できた。
- ・ 自分の動き（個人の技術的なものや、グループ学習における様々な役割の部分など）を見たことで、教師の指導と支援の言葉が伝わりやすくなり、改善しようと努める姿が見られた。
- ・ 準備や片付けでは、自主的に動く生徒が増えた。

エ 活用した情報支援機器・ソフト

- ・ タブレット端末、AVアダプター、HDMIケーブル、卓上スタンド、プロジェクター



オ 写真



(4) 支援機器等教材を活用する際の留意点（選定検討・実践・学習評価）

思春期である生徒の心情に配慮し、全員で見る場面とグループや個人で見る場面とで機器の使い方に気を付ける（良い点や参考となるものについてはプロジェクターを活用して全員で見るようにし、グループとしての改善策を提案する場合や個人への指導や支援ではタブレット端末から直接見るようにする）。

【事例】

＜教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒（個人）に対する指導方法＞

（１）対象とした学年

第２学年

（２）教科名

国語総合

（３）対象とした児童生徒のつまずきの状況

- ・ 「聞き取り」に課題がある（聞き間違い・言い間違いが多い）
- ・ 口頭での説明が続くと集中が途切れやすい
- ・ 学習内容の定着が難しい（長期記憶が困難）
- ・ 学習に意欲がもてない

（４）教科における学習上のつまずきを把握するための方策

ア 実態把握の時期：１学期・２学期

イ 実態把握の方法（実施者・方法）：

- ・ 概ね以下の i ～ v の手順により実施（ii・vについては繰り返し）
 - i 校内コーディネーター…入学前の中学校との引継ぎにおいて学習の様子を把握。
また、仮入学等において保護者・本人から状況を聴取。
 - ii 教科担当者…授業時の気づきや感じたことを授業気づきシートに記入
教科担当者及びサポートスタッフ…生徒観察及び定期考査等の分析
教育相談担当者等…学習上の困難さについて本人聴取
全教職員…学校生活全般の様子から特性に通じるエピソードを集積
 - iii 養護教諭による保護者への当該生徒の「聞き取り」に関する医療受診や生育歴に係る聴取
 - iv 聴覚障害教育センターの特別支援教育コーディネーターの授業参観による実態把握
 - v 上記情報をもとにした教職員による協議

（５）実施した指導内容

ア 学習上においてつまずいている内容

○ 言語能力的な課題

- ・ 語彙が少なく、「現代仮名遣い」「現代語訳」など基本的な語句の意味理解が難しい。
- ・ 自分が理解できる一部の字句に着目し、文章の意味を正確にとらえることができない。（定期考査等でも設問の一部の語句に着目して解答してしまうことがある。）
- ・ 語句（漢字）の読み方がわからないなどの小さなつまずきをきっかけに思考が停滞し混乱する。平静時には思い出せることや正答できることが、考査等の緊張を要する場面では、思い出せなかったり正答できなかったりする。

○ 学習に対する苦手意識

- ・ 中学時代からの長期にわたる成績不振により、学習に対する苦手意識や自信のなさがある。(定期考査は「欠点でなければよい」、小テスト等は「その場が過ぎればよい」と考える)
- ・ 課題・設問について、根気よく考えることが困難。(考査の記述問題でなかなか得点できない。)
- ・ 漢文に対する苦手意識が強く、「わからない」と思い込んでしまうことが多く、集中の持続が難しい。

イ つまづいている背景・原因

○ 聞き取りの困難さに起因すると考えられる言語能力の課題

- ・ 日本語における語頭、サ行音・ハ行音等の聞き取りの難しさ(新出語についてしばしば見られる)
- ・ 語彙力の低さ(言語理解力の弱さ)

○ 派生的に生起していると考えられる学習面での課題

- ・ 注意・集中の持続がやや難しい
- ・ 字形認識に課題(書字が雑・誤字)
- ・ ワーキングメモリーの弱さ
- ・ 学習に対する自信のなさから生じる苦手意識

ウ アに対し実施した指導方法(工夫した点(授業中、授業外))

[授業中]

○ 聞き取りの困難さに起因すると考えられる言語能力的な課題の解消に向けた取組

- ・ 重要事項を説明・確認する際は板書し、口頭のみで伝えることを避ける。
- ・ 漢文の読み方を全てひらがなで示した読みプリントを2種作成。「ヒントなし」は、ひらがなのみ。「ヒントあり」は、漢字に当たるところに傍線あり。
- ・ タブレット端末を書画カメラとして使用することによる学習プリントの拡大提示及び注目する箇所や記入箇所の提示。
- ・ プリント学習における生徒が記入する事項の精選。

○ 学習に対する苦手意識の解消に向けた取組

- ・ ICTを活用した興味・関心を引くような関連資料の視覚的提示。
- ・ 個々が作業する時間を設定し、疑問点を確認できるようにする。
- ・ 毎授業後の自己評価および教員コメントによるフィードバック。

[授業外] ……実施は通級指導担当(当該生徒の副担任)による

○ 聞き取りの困難さに起因すると考えられる言語能力的な課題の解消に向けた取組

- ・ 文字の覚えにくい箇所をマークし、意識しながら書いて覚える等の勉強法の提案
→ 苦手な部分を意識化することで字句を正確に覚えることができ、定期考査の得点も上昇。

○ 学習に対する苦手意識の解消に向けた取組

- ・ 授業後、理解が難しかった事項について本人のつまづきを本人と一緒に確認し、理解・納得させる。
→ 授業中に不明確であった事項を確実に理解することで「わかった」「できた」を実感でき、復習しようという意欲につながった。

- ・ 家庭学習の方法（できること・できないことを整理し、できないところだけを繰り返し復習する）の提案・試行。
 - なかなか覚えられない事項を本人が認識し、効率よく学習する方略を知り、実践することで、家庭学習に励むようになった。勉強量に比して定着が難しく、定期考査の得点は大きく伸びなかったが、「悔しい」という思いをもつようになり、その後の学習意欲につながった。

エ ウの結果（児童生徒の変容を含む）

[授業中]

○ 生徒のつまずきに応じた支援の有効性の確認

- ・ 重要語句を板書等により提示したり、繰り返し音読したりしたことで、聞き間違いや言い間違いが減った。
- ・ 視覚的な提示があることにより授業に集中できるようになり、集中が途切れることがほとんどなくなった。
- ・ 漢文の読みに慣れ、授業後、時間を経てもスムーズに音読することができた。
- ・ 訓点つけの際に、読みプリント2種のうち「ヒントあり」を選び、安心して取り組めることで意欲が見られるようになった。
- ・ 書き下し文がスムーズに書けるようになり、内容についても、授業後、時間を経ても大まかに説明することができた。
- ・ 字を丁寧に書くようになった。
- ・ プリントを拡大提示してスモールステップで授業を展開したことにより「わかる」「できる」を実感し、自分でプリントを見直して間違いに気づくなど、主体的に学べるようになりつつある。

[授業外]

○ 学習意欲の向上

- ・ 定期考査前の家庭学習の時間が全体で5～6時間増加した。
- ・ 苦手なところを意識して勉強することが（定期考査の）結果につながることを実感でき、「もう少しやっておけばもっと得点できたのに」と悔しがる姿が見られた。また「欠点でなければよい」といった発言がなくなり、次回の定期考査に向けて、テスト勉強の開始時期を早めようとしている。
- ・ 学年末考査では得点が上昇した。
- ・ 自分なりの勉強方法を考えることができるようになった。

○ 保護者との信頼関係のさらなる醸成

- ・ 生徒の学校での様子や変容について保護者と情報を共有することで、保護者と連携して本人の頑張りを見守ったり支えたりすることができた。

【事例】

＜教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒（個人）に対する指導方法＞

（１）対象とした学年

第２学年

（２）教科名

理科

（３）対象とした児童生徒のつまずきの状況

- ・ 集中力が低く、板書が遅い。
- ・ 「やる」といいながら、次の瞬間には別のことに気を取られ、注意すると腹を立てる。
- ・ 落ち着きがなく、じっとしている時間が短い。
- ・ 周囲の声や音に過剰に反応する。
- ・ 周囲の状況（人）に流されやすい。
- ・ 取組についての説明を聞いていないことが多々ある（聞き漏らし）。
- ・ 自分の理解できること、興味をもっていることはよく質問したり、それに答えたりするが、自分の理解を超えると集中力が途切れ無関心になる。
- ・ 言語理解力、文章を書く力が不足している。
- ・ 計算ミスが多い。

（４）教科における学習上のつまずきを把握するための方策

ア 実態把握の時期：４月から９月

イ 実態把握の方法（実施者・方法）：

実施者：教科担当

方法：教員による観察及び情報交換等による

（５）実施した指導内容

ア 学習上においてつまずいている内容

- ・ 地域による気候や環境の違いを理解でイメージできず、それに伴う生物体系を理解できない。
- ・ 口頭での説明では、用語を覚えられない。
- ・ 書くだけでは、覚えられない。
- ・ ノートへの書き写しで字が雑になる。

イ つまずいている背景・原因

- ・ 周囲の環境に影響されやすく、集中力が続かないためミスが起こりやすい。
- ・ 学習する習慣がない。
- ・ 語彙力が低い。
- ・ 空間認知力が低い。
- ・ 客観的に物事をとらえた経験が少ない。

ウ アに対し実施した指導方法（工夫した点（授業中、授業外））

- ・ ポイントとなる箇所は説明を繰り返したり、協調したりする。
- ・ 写真や映像を見せて、イメージしやすいようにする。
- ・ 板書の文字ははっきりと大きく書く。
- ・ プリントを準備し、（ ）内に記入させる。
- ・ プリントの（ ）に番号を振り、今どこを説明しているのか迷わないよう配慮する。
- ・ 問題に取り組みさせる際、選択肢を設けて考える手だとする。
- ・ 答えに至るまで、ICTを用いて本文を一緒に辿りながら進めていく。

エ ウの結果（児童生徒の変容を含む）

- ・ 説明回数を増やすことで、取り組むべき活動を理解することができた。
- ・ 写真やイメージの映像を加えることで、生徒がイメージすることにつながった。
- ・ 質問内容を的確に理解できる場合とできない場合があったが、疑問を感じることはできた。
- ・ （ ）に番号を振ることで、周囲の生徒と同じペースで取り組む時間が増え、毎日にプリントを仕上げ提出できるようになった。
- ・ 読みやすくわかりやすい字を心掛けたことで、どの部分に取り組んでいるか理解しながら、活動に参加することができた。
- ・ 自主的な取組までは至らなかった。

【事例】

＜教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒（個人）に対する指導方法＞

（１）対象とした学年

第２学年

（２）教科名

体育

（３）対象とした児童生徒のつまずきの状況

- ・ 集中力が低く、板書が遅い。
- ・ 「やる」といいながら、次の瞬間には別のことに気を取られ、注意すると腹を立てる。
- ・ 落ち着きがなく、じっとしている時間が短い。
- ・ 周囲の声や音に過剰に反応する。
- ・ 周囲の状況（人）に流されやすい。
- ・ 取組についての説明を聞いていないことが多々ある（聞き漏らし）。
- ・ 自分の理解できること、興味をもっていることはよく質問したり、それに答えたりするが、自分の理解を超えると集中力が途切れ無関心になる。
- ・ 言語理解力、文章を書く力が不足している。
- ・ 計算ミスが多い。

（４）教科における学習上のつまずきを把握するための方策

ア 実態把握の時期：４月から９月

イ 実態把握の方法（実施者・方法）：

実施者：教科担当

方 法：教員による観察及び情報交換等による

（５）実施した指導内容

ア 学習上においてつまずいている内容

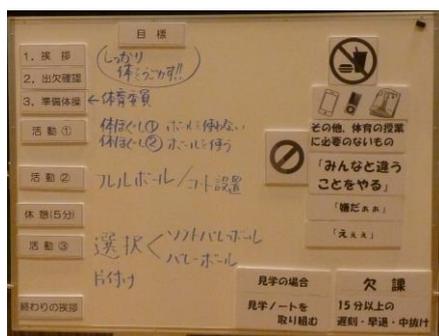
- ・ 自分の都合で済ませようとする。
- ・ 説明時など、話を聞くことができず、その後の活動が分からなくなる。
- ・ 自分の意見を伝えず、他者の考え頼りになる。
- ・ 自分の思いつく好きな活動をしてしまい、集団での活動に遅れてしまう。
- ・ TPOを考えずに自分本位の行動を行う。
- ・ ボディーイメージが乏しく、運動技能面でぎこちなさがある。

イ つまずいている背景・原因

- ・ 周囲の環境に影響されやすく、集中力が続かないためミスが起こりやすい。
- ・ 学習する習慣がない。
- ・ 語彙力が低い。
- ・ 空間認知力が低い。
- ・ 客観的に物事をとらえた経験が少ない。

ウ アに対し実施した指導方法（工夫した点（授業中、授業外））

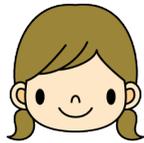
- ・ 集中できるように、授業前に不必要な物は片付けるよう言葉かけをする。
- ・ 開始時刻前、開始時刻を全体に対して予告をする。
- ・ 流れを示したパネルを使い、見通しをもたせる。
- ・ 授業中のルールを提示する。
- ・ 授業展開をパターン化する。
- ・ 活動ごとにゴールを示す。
- ・ 補足的な確認を個別に行う。
- ・ 役割（体操・号令・整列）を与え、活動に責任をもたせる。
- ・ 準備体操など、具体的な行い方を示したシートを用意する。
- ・ 球技など、試合の運営に関わりをもたせ、自主性を高める。
- ・ 試合や練習を通して自分の意見や他者の考えを確認する時間を設定する。
- ・ 休憩時間に入る前、次の活動内容について予告をする。
- ・ 適切な行動ができた際は、その場で褒める。
- ・ 指示を簡潔に行う。
- ・ 動きのタイミングなどを音に置き換え、タイミングを捉えるきっかけを作る。
- ・ 二人組等の活動を設定し、他の生徒と自分の動きの違いに気づかせる。



エ ウの結果（児童生徒の変容を含む）

- ・ 授業開始前に不必要な物を片付ける等、ルールを提示し毎時間全体に対して確認することで、対象生徒のみならず周囲の生徒の心構えなどの環境も整い、その結果、集中して活動に取り組む時間が増えた。
- ・ 活動に見通しを示すことで、安心して活動に取り組むことにつながった。
- ・ 授業の流れをパターン化することで、生徒が遅れて参加した場合や授業途中で活動が中断してしまった場合でも、再度授業に参加することにつながる場面があった。
- ・ 役割を与えることで責任をもって授業に取り組むようになり、また役割を達成できた場合、すぐに称賛することで、学習に対するモチベーションが向上した。
- ・ 活動の間の休憩前に、再開後の活動を予告することで、スムーズな切り替えを行うことができた。
- ・ 運動技能の練習の際、教員による言葉かけの際、カウントなど加えることで、運動技能の向上が見られた。
- ・ 他の生徒の動きをモデリングできる場面の設定を繰り返すことで、自分の動きを修正しようとする様子が見られた。

実践事例①



学年・性別 : 3年・女子
 指導時間 : 週1時間
 通級の種類 : 自校通級

<p>本人や保護者の思い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・不安なく授業に参加できるようになりたい。 ・他の人とたくさん話せるようになりたい。(本人) ・高校在学中に自ら他者との関わりをもてるようにして、卒業後に自信をもって社会に出ていけるようにしてほしい。(保護者) 		
<p>本人の状態 ◎: ポジティブ要素 ▲: ネガティブ要素</p>	<p>◎生活態度はまじめで、何事にも誠実に取り組む。 ▲慣れない場面では、どう行動したらよいかかわからず不安になることがあり、不安がもとで体調を崩すこともある。 ▲コミュニケーションに苦手意識があり、慣れない人と過ごす場面では、緊張したり不安になったりする。 ◎慣れた人とは、比較的リラックスして会話することができる。</p>		
<p>考えられる要因背景</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・不安の強さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションへの苦手意識 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張しやすい
<p>関連する自立活動の区分・項目</p>	<p>4(2)環境の把握 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。</p>	<p>3(1)人間関係の形成 他者との関わりに関する基礎に関すること。</p>	<p>2(1)心理的な安定 情緒の安定に関すること。</p>
<p>学習活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・認知(物事の見方やとらえ方)と感情の関係性を学ぶ ※1 	<ul style="list-style-type: none"> ・人との関わりに関するSST ※2 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレスマネジメント(リラックス法)
<p>指導を行う上でのポイント</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の認知の特徴を知り、見方、とらえ方を変えることにより、感情がどう変わったかなど、自分の変化を感じられるようにする。 ・不安を感じる場面について、多様なとらえ方を知り、うまくやり過ごせるように、ソーシャルストーリーにより考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・望ましい対応方法について、本人のペースで考え、本人の言葉で表出できるように、文字や図を用いて考えを整理し、少しずつ話せるようにする。 ・本人の日常生活に沿ったモデル行動と一緒に考える。(できれば複数) 	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸法、筋弛緩法など、気軽に実践できるものを扱い、本人に合ったものが見つけられるようにする。 <p><呼吸法> 鼻からゆっくり息を吸い、一旦止めてから口からゆっくりと息を吐く。</p> <p><筋弛緩法> イスに座ったまま上に伸び、脱力する。その他、ストレッチやマッサージ等。</p>

指導を行なった結果



- 自分の不安な気持ちを客観視することができるようになり、不安を感じる場面において、自分の思いを話したり自分なりに対応したりできるようになりました。
- SSTの学習により、「聞く」「話す」コツをつかむことができ、以前よりも会話がスムーズになりました。

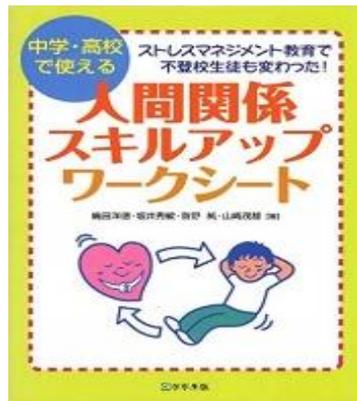
今後に向けて

- 卒業後も、新しい環境で戸惑ったり不安になったりすることが予想されます。誰に何を相談したらよいかをあらかじめ知っておくと安心でき、必要以上に不安を感じなくてすみます。

※1 「中学・高校で使える
人間関係スキルアップ
ワークシート」
学事出版（株）

※2 「SST ワークシート」
（株）かもがわ出版

使用教具



ワンポイント
アドバイス

- 特別な指導を受けるにあたっては、本人の意欲が重要です。目的等について1つ1つ丁寧に説明を行い、本人が意欲をもって学習に臨むことで大きな効果が期待されます。
- 自己肯定感が低く、なかなか自信がもてない生徒は、成功体験に対する自己評価が低い場合があります。本人の成功体験と一緒に振り返り、本人の成長した点について伝える機会をもちましょう。過去の自分と今の自分を比較して、本人が成長を実感できるようにすることも効果的です。
- 学校生活の中で困っていることなどについて、話を聞く機会をもちましょう。本人が感じていることを知ることで、配慮すべき点が見えてきます。本人にとっては、しっかり聞いてもらえることにより心理的不安を軽減することができ、伝えることによって状況が改善されれば、自助努力の力を育てることにもつながります。
- ソーシャルストーリーでは、生活で起こりうる状況や起こった事実を文に表し、状況に対する望ましい行動や対応の仕方を選択できるようにします。また、相手の感じ方、思いなども文に取り入れるとともに、全体を通じて、本人がその状況を肯定的に捉えることができるよう進めることが大切です。

実践事例②



学年・性別 : 2年次生 男子
 指導時間 : 週1時間
 通級の種類 : 自校通級

<p>本人や保護者の思い</p>	<p>(本人) ・経済的に自立したい。 (保護者) ・規則正しい生活を送ってほしい。</p>	
<p>本人の状態 ◎: ポジティブ要素 ▲: ネガティブ要素</p>	<p>◎おっとりした性格で、友人関係ではトラブルが少ない。 ◎素直な性格である。 ▲生活のリズムが崩れやすい。 ▲周囲に影響されやすく、強い者に従ってしまうことがある。 ▲話を聞くことはできるが、意図や内容を理解できていないことがある。</p>	
<p>考えられる要因背景</p>	<p>・ゲームを遅くまで行ってしまうなど、スケジュールや優先順位のつけ方が苦手。</p>	<p>・他者や自分の考え、話の内容を要約することが苦手。</p>
<p>関連する自立活動の区分・項目</p>	<p>1. 健康の保持 (1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関する事 (5) 健康状態の維持・改善に関する事 2. 心理的な安定 (2) 状況の理解と変化の対応に関する事</p>	<p>3. 人間関係の形成 (3) 自己の理解と行動の調整に関する事 6. コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事</p>
<p>学習活動</p>	<p>・1週間のスケジュールの確認 ・メモの取り方、メモ帳の活用の仕方</p>	<p>・聞き取り学習 ・要約活動 ・SSTカード</p>
<p>指導を行う上でのポイント</p>	<p>・自分の日常の行動を振り返ることが苦手なため、教員と一緒にゆっくり思い出しながらシートに記入する。また、良い例を参考にし、自分の行動との違いに気づかせる。 ・メモを取るタイミングや内容など教員と一緒に考え、メモを取る必要性について、意識を高める</p> <p>・「聞き取り学習」では、「いつ、どこで、なにを(が)、どうなった」や「数字」など、ポイントを絞った聞き取りができるよう視覚的な支援を行い、注意を向かせる。 ・「SST」では、楽しい雰囲気の中で、リラックスして、自分や他者の行動や発言に着目させる。</p>	

指導を行なった結果



- スケジュール確認を通して、本人から「決まった時間におきるようにしよう」という言葉がでてくるなど、意識をするようになってきました。今後は、定着できるよう継続的な支援が必要です。

また、学校を休む場合には「電話連絡をする」など、具体的に示すことにより、自分で行うことができるようになりました。

- SST で取り組んだ「他者の考えを聞く」「自分の考えを発言する」では、ルールに則り静かに傾聴、自分の考えを相手に話すことができるようになっていました。今後は、自分の考えを整理して聞き取りやすく話せるように継続的に支援が必要です。

今後に向けて

- 聞き取り学習では、ポイントを絞った支援を継続して行いながら、要点をまとめる活動を引き続き行う必要がある。また、次に自分の考えについてまとめる活動に発展させたい。
- 日々のスケジュールや金銭の取り扱いなど、自ら意識することにつながっているが、定着するためには、定期的に繰り返して学習する必要がある。また、状況に応じて、保護者との連携が必要である。

使用教具

※1

『青年期の SST 2015 厳選シリーズ』一般社団法人ダイジョーブ・プロジェクト



※2

『ヒットマンガ』
タンサン株式会社



※3

『はあって言うゲーム』
株式会社 幻冬舎



ワンポイントアドバイス

- 生活のリズムについては、保護者との連携が重要です。子どもの困りを共有し、それを軽減するためにできることを一緒に考え、家庭でできること、学校でできることを進めていきましょう。
- ロールプレイ等の実践を通じて、自尊感情が高まるような成功体験を積みせていきましょう。